

84. レオナルド・ダ・ヴィンチ理想都市模型に関する学際的研究

静岡文化芸術大学デザイン学部 准教授 松田 達

概要

レオナルド・ダ・ヴィンチが15世紀末に構想した立体的都市構想が、20世紀半ばにミラノで巨大木製模型としてつくられた。これと同じ模型が1980年代に西武百貨店で展示され、武蔵野美術大学に保管された後、静岡文化芸術大学に寄贈された。この模型の来歴やレオナルドの都市構想の意義を探るため、建築史、都市計画、美術、博物館学など複数の専門分野の研究者で、学際的な研究を進めた。静岡文化芸術大学ギャラリーで展覧会「レオナルド・ダ・ヴィンチ理想都市模型展」を開催し、レオナルド研究の最前線の研究者（長尾重武氏、池上英洋氏ら）を招いてシンポジウムを行い、またイタリア・フランス現地調査を実施し、研究会議を重ねた。

結果、レオナルドの構想と模型の差異と共通点、想定される敷地、模型の来歴、レオナルドの受容の変遷等を明らかにした。日本の模型はA・M・ソルダティーニが製作した模型を、博物館学者O・クルティが完全複製したものであり、第二号のオリジナルともいえる由緒あるものであることも明確になった。模型の3D映像化、VR化、ARを用いた展示手法の開発を行ったことも、重要な研究成果のひとつである。調査の最終段階での討議の結果、ミラノのスフォルツェスコ城の立体的構成がレオナルドの理想都市に影響を与えた可能性の有無やその内容を探ること、そして日本における都市模型の意義を検討することなどが、新たな課題として見えてきた。

最後に、本研究を2年間支えてくれた三菱財団に深く感謝申し上げたい。特にイタリア・フランスでの現地調査、224ページの研究成果報告書『レオナルド・ダ・ヴィンチ理想都市に関する学際的研究—なぜミラノと浜松に、同じ巨大模型が存在しているのか？』の制作は、財団の助成金なしには決してあり得なかった。

背景および目的

15世紀末にレオナルド・ダ・ヴィンチは、ペスト禍により人口の数分の一が失われたというミラノの惨状を目の当たりにし、感染症から身を守る理想都市を構想した。それは衛生的な観点から様々な工夫が加えられた立体都市であり、近代の都市計画を先取りした画期的な都市構想であった。20世紀半ばにミラノでレオナルドを記念した博物館が設立される際、アルベルト・マリオ・ソルダティーニという人物が、レオナルドの断片的なスケッチやテキストを解釈しつつ、この構想をひとつの巨大な木製模型として作りあげた（図1）。

この模型とまったく同じ模型が日本に存在し、2021年の秋に縁あって静岡文化芸術大学に寄贈されることとなった（図2）。1986年に池袋の西武百貨店でイタリアンフェアが行われる際にイタリアから送られてきたものである。国内での何度かの展示を経ながら、ルネサンス建築の専門家である長尾重武氏により、長らく武蔵野美術大学に保管されていたが、長尾氏の退官から数年が経ち、ゆかりがあった浜松へと運ばれてくることとなった。

筆者らはこの模型の重要性を鑑み、模型にまつわる複数の謎や来歴を明らかにすることで、レオナルドの都市計画家という新たな側面に光をあてることを目的とする研究を行おうと考えた。レオナルド研究、建築学、都市計画、美術史、博物館学、模型論、展示方法論など、多様な観点において明らかにすべき問題があると考えられたため、専門性の異なる複数人の研究者と連携し、学際的な研究を進めることとした。



図1. ミラノのレオナルド・ダ・ヴィンチ記念国立科学技術博物館にある理想都市模型（撮影：松田達）

模型の展示方法は非常に参考になる。背後には理想都市をめぐる映像が流れていた。また模型側面の小口部分を見せないように埋め込む、周囲を深い青一色とし、模型の白さを際立たせていた。

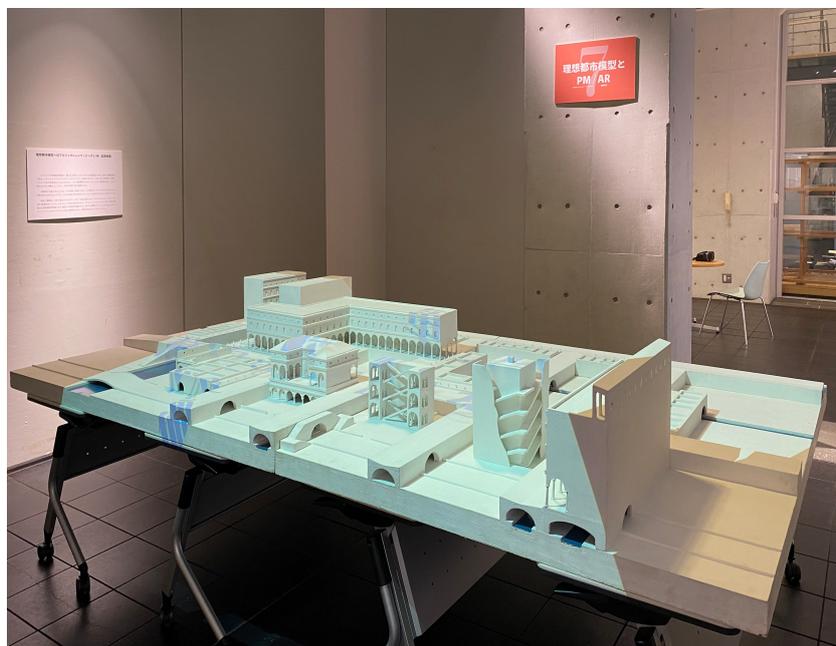


図2. 静岡文化芸術大学に寄贈された理想都市模型（撮影：松田達）

写真は「レオナルド・ダ・ヴィンチ理想都市模型展—感染症に立ち向かう500年前の理想都市」での展示の様子。

成果

「レオナルド・ダ・ヴィンチ理想都市模型展」とシンポジウムの開催

本模型は約 3.0m×1.7m と大きい。国内における本模型の展示は、おそらく 20 年近く行われていなかった。そこで模型を研究者や一般の方など多くの人に見てもらおうと考え、展覧会を企画した。当時まさにコロナ禍の最中にあり、感染症から身を守る都市模型はルネサンスと現在に共通するテーマを提供してくれると考えられた。また長尾重武氏、池上英洋氏ら、レオナルド研究の第一人者らを招いてシンポジウムを行い、本模型にまつわるこの時点の知見をできる限り集約することを試みた。

展覧会会期は 2022 年 11 月 17 日から 12 月 11 日の約 3 週間とし、静岡文化芸術大学のギャラリーにて「レオナルド・ダ・ヴィンチ理想都市模型展—感染症に立ち向かう 500 年前の理想都市」を開催した(図 3)。本模型の展示を中心としながら、レオナルド関連の希少図書の展示、ルネサンスの他の理想都市模型の製作と展示、模型の実測をもととした 3 次元モデル化、映像制作、研究成果の一部の展示、VR や AR による新たな空間体験など充実した展示内容となり、複数の新聞に取り上げられた(図 4)。なお、本展示はイタリア大使館からも後援を得た。

展覧会の会期にあわせ、複数のギャラリートークの他、「レオナルド・ダ・ヴィンチの理想都市の夢」と題したシンポジウムを行った。パネリストに長尾重武氏(ルネサンス建築史、武蔵野美術大学元学長)、池上英洋氏(レオナルド研究者、東京造形大学教授)、コメンテーターに高田和文氏(イタリア演劇、静岡文化芸術大学元副学長)らを招き、本研究の研究者らも登壇し(五十嵐、天内、松田)、この模型の存在が意味することを議論した。レオナルド研究における新しい地平を垣間見られるような刺激的な内容となり、この内容は文字起こしをして後述の研究報告書冊子に全文おさめた。

イタリアと日本の 2 つの模型どちらがオリジナルであるのかこれまで明確ではなかったが、シンポジウムを通じた研究者間の情報交換から、1980 年代の展示記録や新聞記事が見出され、日本にあるものがレプリカであることがほぼ確実であることが明らかとなった。



図 3. レオナルド・ダ・ヴィンチ理想都市模型展フライヤー (デザイン: 高橋美羽)

「レオナルド・ダ・ヴィンチ理想都市模型展」(静岡文化芸術大学ギャラリー、2022.11.17-12.11) のフライヤー。フライヤーは学生コンペを開催し、デザインを決定した。



図4. 静岡新聞（2022年11月22日号）の記事
朝刊20面に展覧会紹介記事が掲載。

イタリア・フランスにおける現地調査

2023年3月に、研究チームはイタリア・フランスでの現地調査を行った。イタリアの各地にあるレオナルドに関する美術館を訪れ、またレオナルドと本模型にゆかりがある複数の箇所を訪れた。具体的には、イタリアではトリノ、ミラノ、ヴィジェーヴァノ、パヴィア、ボローニャ、フィレンツェ、ヴィンチ、ローマ、オルビエト、ルッカ、ピサ、カッサーノ・ダッダ、フランスではパリ、アンボワーズ、ロモランタン、ブルジェを順に訪れた。あわせてUAEのアブダビでは現代の理想都市とも言うべきマスター・シティも訪れた。

特にミラノのレオナルド・ダ・ヴィンチ記念国立科学技術博物館では、本模型の双子の模型を実際に見て両者の比較を行った。レオナルドの都市構想にインスピレーションを与えたというミラノ郊外のヴィジェーヴァノの建築群や、レオナルドの生誕地であるヴィンチ村の生家などにも訪れた。晩年のレオナルドが過ごしたアンボワーズのクロ＝リュセ城では、レオナルドが最晩年に再び構想した理想都市ロモランタンに関する新たな情報を得ることが出来た。

他にもミラノ時代のレオナルドが過ごしたスフォルツェスコ城の立体的な構成、レオナルドも設計に関わったと言われるナヴィリオ運河に見られるミラノ周辺の水運体系、フィレンツェ中心部でヴェッキオ宮殿-ウフィツイ美術館-ポンテ・ヴェッキオ-ピッティ宮殿を空中でつなぐ「ヴァザーリの回廊」からの示唆、ヴィンチ村における複数の建物に分散的に紹介されているレオナルド関連展示、レオナルドとの同時代性を感じさせる16世紀にできたオルビエトの二重螺旋階段（サン・パトリツィオの井戸）、フィレンツェから流れてきたピサにおけるアルノ川の穏やかな流れ、レオナルドが塔に滞在して鳥の飛行に関する研究を行ったカッサーノ・ダッダにあるヴィスコンテオ城の地下にあるレオナルドのギャラリー（ソルダティーニによる初期のレオナルドの展示パネルが飾られている）など、レオナルドと理想都市構想をつなぐ多くの貴重な資料や情報を得ることが出来た。

研究成果とその公開

こうした展覧会、シンポジウム、現地調査等を踏まえ、各研究者は研究会議や日常的なメールのやりとりで情報交換を重ね、それぞれの成果を発表しつつ（発表論文等参照）、研究を進めてきた。研究成果は多様で、数も多く、かつレオナルド・ダ・ヴィンチに関する内容ということで、より多くの人の目に触れるべきだと考えた。

そこで、これまでの研究内容と成果を一冊の研究成果報告書としてまとめることとした。編集を菊地尊也氏に依頼し、展覧会、シンポジウム、現地調査の記録に加え、論考、関連資料、文献紹介、座談会なども含め、研究期間の最後に、全 224 ページの冊子が完成した。装丁デザインも凝っている (図 5)。

冊子は限定 1000 部とし、関係者、研究者、国立国会図書館を含む全国の図書館に寄贈した他、研究成果を公開する動画を放送プラットフォームのシラスから配信し (図 6)、広く一般の希望者らにも配布した。このフィードバックから、さらなる研究の展開につなげることを意図している。

研究の最終段階で行った研究を振り返る座談会の内容も、筆者らが 15 年以上運営しているインターネットラジオ「建築系ラジオ」から配信した[概要は冊子にも収録]。レオナルド・ダ・ヴィンチは、研究者だけではなく一般の愛好者も多い。そこで研究内容を報告書、映像、音声など複数のチャンネルから公開し、社会的貢献にもできる限り寄与できるようにした。



図 5. 『レオナルド・ダ・ヴィンチ理想都市模型に関する学際的研究—なぜミラノと浜松に、同じ巨大模型が存在しているのか?』表紙

松田達（編著）、天内大樹、五十嵐太郎、菅野裕子、田中裕二、横手義洋（著）、静岡文化芸術大学 デザイン学部 デザイン学科 松田達研究室、2024



図 6. シラス「レオナルド・ダ・ヴィンチ理想都市模型に関する学際的研究—レオナルド・ダ・ヴィンチと理想都市模型」

天内大樹、五十嵐太郎、菅野裕子、田中裕二、松田達、横手義洋、建築系勝手メディア ver.3.0、<https://shirasu.io/t/kenchiku/c/kenchiku/p/20250107002842>

結果とまとめ

理想都市模型のオリジナルとレプリカ

レオナルド・ダ・ヴィンチ理想都市模型が、なぜミラノと日本でほぼ同じものが2つあるのか、1950年代につくられたオリジナルはいったいどちらであるのかということは、研究を開始する段階での最大の謎であった。模型の明確な来歴が、これまで明確ではなかったのである。仮説としては、1986年に日本に送られたものがオリジナルで、その時ミラノに同じものをおそらくは西武からの出資で新しく作りなおした、ということも考えられた。

しかし、以下の2点から、オリジナル模型はやはりミラノにあるものであり、現在浜松にあるものは1986年につくられたレプリカであることが確実であると判明した。1点目は、長尾氏が所蔵していた1986年の展示の際のパンフレット（長尾重武「レオナルド・ダ・ヴィンチと理想都市」、32頁、西洋環境開発、冊子収録）の記述に「今回、西武百貨店で開催されるイタリア展で公開されるレオナルド・ダ・ヴィンチ理想都市立体復元模型は（中略）巡回展示用に製作した完全複製モデルです」と記述があることである。2点目は、ミラノの模型の1956年当時の写真（Carlo Soldatini (a cura di), *Alberto Mario Soldatini : aviatore, artista, architetto : un protagonista ritrovato dell'Italia degli anni '50*, Gangemi Editore, 2020, pp.42-43）を現在の日本の模型とよく見比べてみると、ひとつだけ写真から分かる違いがあり、模型正面から見て右手前の四重らせん階段の建築物が、ミラノのものは一番外側が階段であるが、日本のものはその階段の外側に部分的な壁が表現されていることである。おそらくは階段の外側に壁があったことを表現して付け加えられたものだと考えられる。

日本にある理想都市模型の価値

日本にある模型はレプリカであるとはいえ、オリジナルにまさるとも劣らない相当な価値があるものと考えられる。なぜなら模型はもともと複製可能な制作物であり、オリジナルに特権的な価値がある絵画などの美術品とは事情が異なるためである。本模型は3m×1.7m、重さ数十キロの巨大な模型であり、またすでに制作から40年が経っており、本模型はレプリカというよりむしろ第二号のオリジナルというべきものである。模型に価値を

示す根拠のひとつは、前述のパンフレットで「クルーティ氏の指導により」製作したと記載されていることである。

この「クルーティ氏」は、間違いなくレオナルド記念国立科学技術博物館の創設者の一人であるオラツィオ・クルティ(1926-1999)のことを指しているだろう。クルティはイタリアの博物館学者、エンジニアであり、また海軍模型の愛好家でもあり、1950年代には海軍模型協会を設立した人物でもある。さらに日本との関係では、1974年の国立科学博物館の「科学者レオナルド・ダ・ビンチ展」(1974年4月27日～7月31日)の企画にも携わった人物でもある。なお、この展覧会は、東京国立博物館で開催され、来館者150万人以上が企画展単館入場者数世界記録となった「モナ・リザ展」(1974年4月20日～6月10日)にあわせて開催された別展覧会である。

つまりは、1956年にソルダティーニが制作した模型を、1986年にクルティが監修指導して「完全複製」したものが浜松にある本模型であるといえる。

様々な研究成果

以上は明らかとなった事実の一端であるが、研究チームはその後さらにそれぞれの観点で研究を進めた。冊子にも収録されているそれぞれの論考について触れておきたい。

天内大樹は「神か人か—都市模型を眺める視点—」において、レオナルドの都市構想が同時代の「神の視点」からの理想都市に対して、より「人の視点」をもとにした人間的なものであること、ソルダティーニによる模型化は中間的な「鳥瞰的な視点」によるもので、レオナルドの構想を「人間的」(アイレベル)かつ「理想」(神の視点)の都市模型として表象していることを示した。

菅野裕子は「レオナルド・ダ・ヴィンチの描いた建築ディテール—フォースター手稿Ⅲ《円柱のベースの分析》について—」において、レオナルドが理想都市構想のスケッチにおいて列柱廊を多く描いていたことから、レオナルドの柱の描き方に着目し、特にフォースター手稿での柱礎がアルベルティを参考に行っていること、一方、より技術的、実践的なアルベルティのデッサンとは異なり、正円や正方形など単純な幾何学図形で再構成するなど、より研究的、学問的な方向性があることを指摘した。

田中裕二は「レオナルド・ダ・ヴィンチ展の受容—日本の展覧会小史—」において、日本における3つのレオナルド・ダ・ヴィンチ展を比較しつつ、日本におけるレオナルド受容の変遷を考察した。1942年の「アジア復興レオナルド・ダ・ヴィンチ展」はレオナルドを戦時中の「国家総力戦」の文脈でプロパガンダ的に利用し、1974年の「モナ・リザ展」は一点豪華主義によって入場者数の成功を得る一方、過密な展示環境や障害者排除の問題を残し、1986年の「イタリア展」は、民間の文化事業として国家的な利用から解放され、本理想都市模型も都市開発との関連で扱われるなど平和的なものであったが、一方で残された記録がほとんどないなどの問題も浮き彫りとなった。

松田は「レオナルド・ダ・ヴィンチ理想都市模型の謎—浜松—東京—ミラノ—ヴィジェーヴァノ—ロモランタン—」において、レオナルドの理想都市模型の由来を時系列を辿るように分析し、1980年代に制作された模型の意義、ソルダティーニの模型における理想都市の再構成の方法、レオナルドの理想都市の敷地がヴィジェーヴァノ近郊のティチーノ川近くであった可能性が高いこと、ロモランタンの王宮都市構想はミラノ時代のものと関連はしているが運河で大西洋と地中海をつなげるなど別の意義があることなどを明らかにした。

横手義洋は「二〇世紀イタリアが求めたレオナルド・ダ・ヴィンチ」において、レオナルドが20世紀イタリアの国家的アイコンとして求められ、その位置づけを変化させながら受容されてきたことを論じた。具体的には、19世紀後半には当時のイタリアの代表的建築家ルーカ・ベルトラミによりルネサンスの巨匠という国家的な英雄として、19世紀末以降は科学技術的な業績にも注目が集まり、1940年前後には「ラテン・キリスト教・ローマ文明の象徴」としてのレオナルドとファシズム的理想やイタリア民族への賛美が結びつけられ、また戦後は国際的で世界的な天才科学者・芸術家としてより恒久的な施設(すなわちレオナルド・ダ・ヴィンチ記念科学技術博物館)の建設にもつなげられたことなどを明らかにした。

さらに、理想都市模型は展覧会において3D映像化、VR化、AR化などされており、3次元的数据としても再構築された(図7)。これらは様々な活用できるものであり、こうしたデータ化と展示方法の開発も研究成果のひとつである。

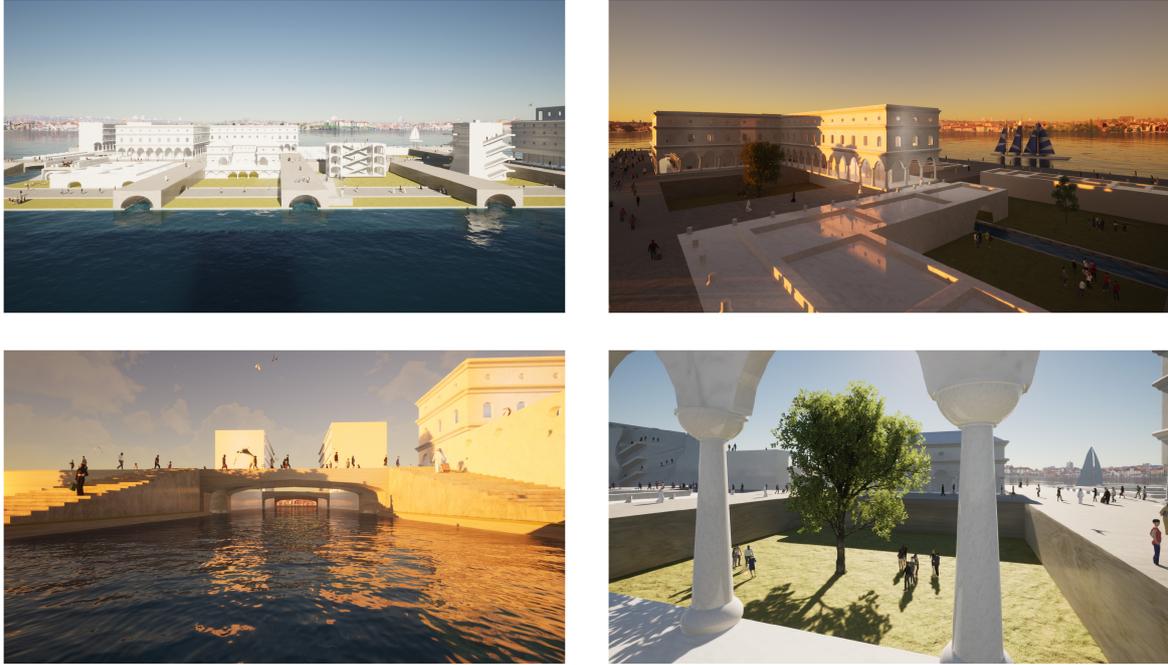


図 7. 3DCG 化されたレオナルド・ダ・ヴィンチ理想都市模型（画像・映像制作：松田達+静岡文化芸術大学有志学生）

模型の実測調査などを経て 3D 化されたレオナルド・ダ・ヴィンチ理想都市模型。実際には画像だけではなく、映像として制作されており、動画で理想都市の空間を体験することができる（展覧会ではさらに 360 度 VR で空間内に入り込む体験をすることが出来た）。映像は以下。<https://vimeo.com/771287318>

おわりに

以上のように、本研究では複数の分野の研究者が連携して研究を進めることで、レオナルド・ダ・ヴィンチの理想都市模型をめぐる、学際的な研究を進めた。当初、本模型が持っていた複数の謎のほとんどは明らかとなり、模型の由来も明確になった。またレオナルドによる理想都市構想の意義や詳細についても多角的に考察した。レオナルドがどのように受容されてきたのか、日本とイタリアでの歴史の変遷も示した。こうした研究成果を一冊の報告書としてまとめ、この報告書とともに研究を振り返る映像も公開することにより、研究内容をできる限り開かれたものとし、今後の研究にも、一般の方々の関心にも、接続できるようなかたちで研究をまとめた。さらには理想都市構想の 3 次元データ化、映像化も行った。

最後に、こうした研究を 2 年間支えてくれた三菱財団に深く感謝申し上げたい。特にこの研究ではイタリア・フランスでの現地調査が必須であったが、複数の研究者らでの海外調査を実施したことは、三菱財団による助成金がなくてはあり得なかった。さらには研究のまとめを、しっかりデザインされた一冊の研究成果報告書として印刷・製本できたことも、財団による助成金のおかげであった。ありがとうございました。

(完)

発表論文等

- 1) 長尾重武、池上英洋、五十嵐太郎、(パネリスト)、高田和文、天内大樹 (コメンテーター)、松田達 (モデレーター)、レオナルド・ダ・ヴィンチ理想都市模型展シンポジウム「レオナルド・ダ・ヴィンチと理想都市の夢」静岡文化芸術大学、静岡県浜松市、2022.11.27

- 2) 五十嵐太郎、市川紘司、「時評と雑談★11月号」『建築系勝手メディア ver.3.0』シラス、2022.11.30、
<https://shirasu.io/t/kenchiku/c/kenchiku/p/20221129>
- 3) 五十嵐太郎「レオナルド・ダ・ヴィンチ理想都市模型展——感染症に立ち向かう 500 年前の理想都市」、
artscape レビュー、DNP 大日本印刷、2022 年 12 月 25 日号、2022.12.25、https://artscape.jp/report/review/10181213_1735.html
- 4) 天内大樹、パネルディスカッション「建築と模型」、2022 年度日本建築学会（北海道）概要報告、日本
建築学会『建築雑誌』、vol. 1771、2023.2、p. 53
- 5) Daiki AMANAI, “Positions of Models in the Architecture: Theme Park, City, and Modern Movement” ,
Shizuoka University of Art and Culture Bulletin, vol. 23, pp. 29-36, [https://suac.repo.nii.ac.jp/?
action=repository_uri&item_id=1878&file_id=18&file_no=1](https://suac.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=1878&file_id=18&file_no=1), 2023.3.
- 6) 松田達「レオナルド・ダ・ヴィンチ理想都市模型展」をめぐって—感染症に立ち向かい、20 世紀を先
取りした都市計画」『地中海学会月報』、2023 年 4 月号（458 号）、地中海学会、2023.4、p. 6
- 7) 五十嵐太郎「【45°の視線】建築史家・建築批評家 五十嵐太郎氏 寄稿 イタリアの越境的なデザイン」、
建設通信新聞公式ブログ、建設通信新聞、2023.4.26、<https://www.kensetsunews.com/web-kan/818865>
- 8) 五十嵐太郎「レオナルド・ダ・ヴィンチめぐり」、artscape レビュー、DNP 大日本印刷、2023 年 6 月 1
日号、2023.6.1、https://artscape.jp/report/review/10185125_1735.html
- 9) 天内大樹、展覧会解説「分離派建築会 100 年——建築は芸術か？」『大正イマジュリイ』、no. 17、
2023.6、pp. 154-157
- 10) 松田達「巻頭論文 都市における超高層建築とその公共性をめぐって」『建設労働のひろば』、no. 127、
東京土建一般労働組合、2023.7、pp. 5-14
- 11) 天内大樹「都市景観と歴史展示の多元性——ポスト・コロナの建築・デザイン史」『現代思想』臨時増
刊 vol. 51、no. 10、2023.8、pp. 186-197
- 12) 菅野裕子「アルベルティ『建築論』の二つのドリス式柱頭について」『日本建築学会大会学術講演梗概
集』、日本建築学会、2023.9、pp. 203-204
- 13) 松田達、横手義洋、林要次、川勝真一（編著）、『建築思想図鑑』、学芸出版社、2023.9
- 14) 松田達（モデレーター）、伊藤亜紗、金野知恵、西沢立衛（パネリスト）、塚本由晴、宮下智弘（コメ
ンテーター）「歴史的に振り返る with コロナ」（2022.11.20）、『歴史的空間コンペティション 2022 第 11
回「学生のまち・金沢」設計グランプリ アーカイブ』所収、学生団体 SNOU 編、総合資格学院、
2023.12.25、pp. 18-35
- 15) 天内大樹「復興記念館の設置目的と展示—東京・仙台・浜松の比較—」日本文化政策学会第 17 回年次
研究大会分科会 I-D、青山学院大学 17 号館、東京、2024.3.16
- 16) 天内大樹「空間のグラフィック表現をとりまく力」『建築雑誌』 vol. 139、no. 1786、2024.4、pp. 38-41
- 17) 松田達「なぜイタリアの都市建築はどの時代も魅力的なのか—トリノからローマへ 近現代から古代へ
の廻行への旅」、じゃじゃの私設図書館 イタリア展（イタリア建築セミナー）、じゃじゃの私設図書館、
静岡県浜松市、2024.7.20
- 18) 松田達（編著）、天内大樹、五十嵐太郎、菅野裕子、田中裕二、横手義洋（著）『レオナルド・ダ・ヴィ
ンチ理想都市に関する学際的研究』、静岡文化芸術大学 デザイン学部 デザイン学科 松田達研究室、
2024、2024.9.30
- 19) 天内大樹、五十嵐太郎、菅野裕子、田中裕二、松田達、横手義洋「レオナルド・ダ・ヴィンチ理想都
市模型に関する学際的研究—レオナルド・ダ・ヴィンチと理想都市模型」『建築系勝手メディア ver.
3.0』シラス、2025.2.5、<https://shirasu.io/t/kenchiku/c/kenchiku/p/20250107002842>

- 20) 天内大樹、五十嵐太郎、菅野裕子、田中裕二、松田達、横手義洋「レオナルド・ダ・ヴィンチ理想都市模型をめぐる座談会」『建築系ラジオ』、2024.3.25、<http://architectural-radio.net/archives/250324-13769.html>

その他の研究成果

- 1) 松井健太（司会）、嶋崎礼（副司会）、天内大樹（記録）、2022年度日本建築学会大会（北海道）「建築と模型」[若手奨励] 特別研究パネル・ディスカッション、北海道科学大学、札幌市手稲区、2022.9.8
- 2) 横手義洋「〈レオナルド・ダ・ヴィンチ〉と〈アルベルト・マリオ・ソルダティーニ〉」、レオナルド・ダ・ヴィンチ理想都市模型展、静岡文化芸術大学ギャラリー、静岡県浜松市、2022.11.17
- 3) 菅野裕子「レオナルド・ダ・ヴィンチの描いた建築ディテール―フォスター手稿 III 《円柱のベースの分析》について―」、レオナルド・ダ・ヴィンチ理想都市模型展、静岡文化芸術大学ギャラリー、静岡県浜松市、2022.11.17
- 4) 田中裕二「レオナルド・ダ・ヴィンチ展の受容」、レオナルド・ダ・ヴィンチ理想都市模型展、静岡文化芸術大学ギャラリー、静岡県浜松市、2022.11.17
- 5) 天内大樹「建築のモダンムーブメントと模型」、レオナルド・ダ・ヴィンチ理想都市模型展、静岡文化芸術大学ギャラリー、静岡県浜松市、2022.11.17
- 6) 松田達「レオナルド・ダ・ヴィンチの理想都市模型について―ソルダティーニは、レオナルドの構想をいかにして模型化したのか?」、レオナルド・ダ・ヴィンチ理想都市模型展、静岡文化芸術大学ギャラリー、静岡県浜松市、2022.11.17
- 7) 松田達「ルネサンスの理想都市―パルマノヴァについて」、レオナルド・ダ・ヴィンチ理想都市模型展、静岡文化芸術大学ギャラリー、静岡県浜松市、2022.11.17
- 8) [新聞記事]「ダビンチがスケッチ、感染症から守る理想都市 文化芸術大学で模型展」、中日新聞（東海本社版 遠州版）、2022年11月19日号、2022.11.19（「レオナルド・ダ・ヴィンチ理想都市模型展」について、朝刊17面にて松田の発言が掲載）
- 9) [新聞記事]「ダビンチ「理想都市」紹介 静岡文化芸術大3層構造、模型で表現」、静岡新聞、2022年11月22日号、2022.11.22（「レオナルド・ダ・ヴィンチ理想都市模型展」について、朝刊20面にて松田の発言が掲載）
- 10) 田中裕二、レオナルド・ダ・ヴィンチ理想都市模型展ギャラリートーク「レオナルド・ダ・ヴィンチ展の日本における受容について」、静岡文化芸術大学ギャラリー、静岡県浜松市、2022.11.29
- 11) 松田達、レオナルド・ダ・ヴィンチ理想都市模型展ギャラリートーク「レオナルド・ダ・ヴィンチとルネサンスの都市計画」、静岡文化芸術大学ギャラリー、静岡県浜松市、2022.12.3